

ANARKISMO

ANARKISMO K. LITERATURO 1081

ENHAVO

雑記 (河本乾次、平山房子、滝沢昇)	1
インターナショナルの組織 M-バクーニン	8
挽歌 山口英	16
書評 (小松隆二著「日本アキズム運動史」)	
戸田広介	21
〈大逆事件〉東上記 向井孝	25
想い出すまま 高島洋	29

No. 1 Mar. 1973

雑記

冬眠つれづれ帖

「関西文学」十二月号(昭和四十七年)を本屋の店頭でなにげなく立読み、ふと竹島昌威知さんの「愛染橋周辺」と題す短い詩文がハッと磁石に吸いつけられたように眼中へ飛びこんできた。竹島さんは、寺島珠雄さんと協力して「釜ヶ崎通信」を発行され、大阪の底辺文学の創作に独自の道を歩まれていることに私は敬服している。この「愛染橋周辺」の詩を読んで、最近、大阪の底辺地帯といえ、余りに釜ヶ崎が有名になりすぎて、愛染橋周辺のことを忘れられているとき、愛染橋周辺を取り上げられたことに、竹島さんの大阪における底辺文学に対するその深度は、最近排出する一夜漬の釜ヶ崎作家と同一にすべきでないことを知り、感銘を新たに受けた。

愛染橋周辺とは、現在の浪花区南日東町の東端に戦災前にあった「高津入堀川」にかかつていた愛染橋、その南の増井橋付近の細民街であった。この入堀川は、さらに南へ流れ逢阪下之町に突き当って西へ折れて玉水橋があった。その次が日本橋通りの名呉橋、関谷通りの夕日橋、広田町通りの広田橋があった。川はつづいて今宮戎神社の横を北へとうねり曲って難波の新川となり、湊町

の道頓堀川に出ていたのである。この入堀川も新川も今は埋められて跡形もない。

大正末期まで、名呉橋から夕日橋、広田橋の川沿ひの北側一帯は釜ヶ崎と同じくスラム街の様相を帯びて別名「竹屋裏」(竹間屋があつて川筋に竹がおかれてあつた)と呼ばれ、大阪でのスラム地帯であつた。

まして愛染橋周辺は、大阪のスラム問題に逸することのできない歴史地帯でもあつた。

それは、昭和初期、関市長時代に愛染橋周辺の細民住宅を整理し、日東町に鉄筋のアパートをつくつたのが、大阪市として、それまで放任であつたスラム対策に具体的に乗り出した第一号であつた。残念にもこれがまた最後で、その後スラム対策を成さず、遂に、戦後の釜ヶ崎事件発生にあわて、府と市は、その対策の責任をなすりあい根本的なうつつ手をおくれているのが現状である。もう一つ愛染橋から忘れてならぬのは、明治四十二年、愛染橋西詰に、岡山孤児院の創立者石井十次が、保育社、夜学校、病院、同済館を設置して貧民救済教化事業に乗り出している。石井没後、当時の倉紡の社長大原孫三郎が石井の事業を継承して、石井記念愛染園を設立し、その中に貧民救済研究室を設け社会学的な学問の研究機関となつた。この研究機関が母体として発展したのが「大

原社会問題研究所”であった。

大原社会問題研究所は、大正八年に、大阪、天王寺冷人町につくられた。

誰れも疑問とするところは大原のような資本家がなぜ研究所のようなものを創立したかにある。この動機と見られる要因の一つとして前記のように、愛染園の貧民救済研究室の社会学的学問の研究機関の発展である。

もう一つの要因は、大正六年のロシア革命と大正七年の米騒動である。それと併行して労働運動の勃興は大原社会問題研究所の創立の機運を早めたといえる。

さらに同研究所の特質は、所員の人物関係の優秀と外国文献の豊富な所蔵にあった。

当時、高野岩三郎は、労働代表問題で大学をやめられ、その年の暮れに森戸事件が起って入獄後、森戸辰男は入所した。この事件によって帝大の新進の教授たちが大学をやめて研究所に入ってくる機会をつくり、研究所としては思わぬ優秀な進歩的な学者を所員に迎えることができた。

森戸事件及びクロボトキン論文に関しては「思想の遍歴」(昭和四十七年五月 春秋社)の中に詳しく記述されている。

さらに幸ひなことは、当時の国際的な経済事情がいわゆる替為相場が日本に有利であったことである。ドイツでは極端なインフレの最高期であったため、外国の書物を買うのに日本の貨幣の最も有利なときであったので、所員はドイツ、イギリスに飛んで、大量に参考資料の書物を買ひ込んだのであった。これが同研究所の代々の社会問題の基礎となつて、世界にヒケをとらない立派な存在であった。当時、聞くところによれば十五万冊は所蔵されていたようで、その大半は東京へ移転の際、持ち出され惜しくも戦災で焼けたと伝えられている。しかし大阪に残された分は、同所の書庫は完全であったため書物全部は無事であったと伝えられている。

ところが、この書物は宝のもちくされで、全然利用されることなく、書庫で眠っていると聞いている。

久保譲さんは、戦前、クロボトキン全集出版に際し、研究所から原書を借り出して翻訳され、研究所の書物を利用された。

昭和十二年に、研究所が大阪から東京に移転の際、経済的事情から大阪の建物と書物を大阪府に二十万円で譲渡し、現在の府立図書館、天王寺分館となつてゐる。

余談であるが、私、戦後、ある必要からジョージ・バレットの『アナキスト革命』(鈴木靖之訳)を読みた

く、ところが、手元に戦前発行のこちらの出版物は、全部散逸して了つてなく、たまたま天王寺分館に行つてみると、はからずも発禁のこの小冊子を見つけて読むことができた。

× × ×

バレットに関連して、本年一月に大島英三郎さんところから発行された昭和二年の労働運動社出版の岩佐翁の『無政府主義者は斯く答ふ』の増補、復刻版のことである。

バレットについては、日本では前から知られている二つの論文がある。一つは「アナキスト・レヴルユシヨ」もう一つは「オブ、ゼクシヨ、オブ、アナキズム」である。前者は鈴木靖之訳の「アナキスト革命」(四六版 四〇頁 昭和五年四月十日、黒色戦線社発行)であり、後者は、今回の岩佐翁の「斯く答ふ」である。

この復刻版の特質は、古川時雄さんが「復刻版由来記」に記されているように当時出版されたときの「削除箇所」(ふりがなのないところ)の部分が復活して載せられていることである。そのみならず、戦後に再版されたものには次のような事情があった。「G H Q が外国人の著作権の問題にうるさく、ついに日本人向きに書き直したという箇所を削除した、また、第二問の中の階級斗争をもって、山賊の親分と子分との関係にも似ているとの、

一部分を当時のアナキスト連盟内の紛争を避けるために前記のようにした」と綿引邦農夫さんが、昭和四十五年再版の中で語られている。

そこで今回の増補、復刻版は、前に出されたそういう作為されたものでなく、昭和二年の原本ままのものが出版されたところに意義があり、文献として価値の高いものであることを推奨したい。(冬眠の床より、河本乾次

プラテック

『パリは地下にもう一つのパリをもっている。つまり下水道のパリを。そのパリにも通りがあり、十字路があり、広場があり、袋小路があり幹線道路ありで、泥水が往来していた。たゞ人影が見あたらないだけである』とヴィクトル・ユゴーが一八六〇年代に書いた様に、パリの下水道の古い歴史の一端をしのばせるものに地上での水洗便所がある、と言えば大げさかもしれないが、パリの労働者街の古い水洗便所は実にパリジャンの口ぐせの「プラテック」(実用的)そのものである。

気の遠くなる様な年月をかけて今日に至ったパリの下水道は人間自らが彼等の手によって作り出す巨大な泥水ととりくんだ歴史でもある。足下にその巨大なもう一つ

のパリの顔を秘めてそつけない外鶴を保っている古い水洗便所。それは中央部から前方の水の落し口にむかつて傾斜をもたせたコンクリート床に足を置く台石が二つすえてあるだけである。水漕からたれ下ったひもを引張ると殆んど床一面にザラツと水が流れ出て汚物を傾斜部分から地下に落しこんでいくのである。パリもしくはその周辺の労働者の住居で私が使用した便所は大いそんな具合であった。それも一家族だけの専用ではなく、アパートマンではその階の住人の共同便所であり、おそれ入ったことにはB氏のところではその共同便所に行くためには何時も鍵をもっていかななくてはならなかった。B氏の住居はパリ南西8kmの郊外にある石造りのこぎれいなアパートマンの一階で彼の家族ともう一組の家族が廊下を挟んで向い側に住んでいた。廊下の片側は二階へ上る階段があり、廊下のつきあたりが便所であった。便所にはいつも鍵がかかっていた。そして用を足して外へ出ると再び鍵をかけて自分の部屋へ戻るのである。B氏の家へ始めて行ったとき、彼の妻が私に最初に示したものはその鍵の置場所であった。出口に一番近い台所のすみの戸棚の引き出しであった。B氏の家にいる時、私はいつでも必要なとき無断でその鍵をもって便所へ走る特権にありついで、家族の一員に迎えられた気持ちになった。と

ところが問題は夜であった。パリのアパートマンやホテルなどでは、廊下の電燈は点滅式になっていて、スイッチを入れてから三分程もたつと自動的に消えるのである。(こんなところ「ブラティック」を導くパリジャンの面目躍如である)更に必要なときは再びスイッチを押せばいいのである。そんなことは露しらぬ私は、夜B氏の部屋を出てトイレに行くべく廊下の電気のスイッチを入れてからゆうゆうと便所の鍵を開け、中に入って用を足している最中に停電である。ビックリしたが、仕方がないのでなんとか用をすませ、足元に気を配り乍らどうにか出たものの外の廊下も真っ暗、まだ家の中の様子もよく分らず、手さぐりで鍵をかけていると、B夫人が部屋から迎えに出て来て、廊下のスイッチを押してくれて助かった。便所の中にはスイッチがついていなかったもので、それから夜、B氏の便所へいくときは、鍵と懐中電気を必ず持つ仕儀と相成った。この経験から、行先々のホテルに入ると、階段を登り乍ら、廊下を案内され乍ら、いつも真先に電気のスイッチの位置をたしかめる習慣がついた。

た右手の部屋である。そこでは便所はその階段を降り門を左手に見ながら中庭をつききったところにあった。昼間、その中庭には、いろいろな荷を積んだ車の出入りが烈しく便所の行き帰りを車にしばしばさざられた。夜はP夫人に借りた懐中電気で暗い階段を照らし乍ら、秋の冷気の感じる中庭を通って便所へ行った。ここには鍵はなかった。

もっとも、ホテルやデパートそして最近建ったマンション等は、日本でいう洋式便所の形体であった。そして個人の家以外で、街のどこかで便所を使用するためには、すべて有料であった。金勘定に不慣れな私の様なお上りさんは、余裕をもって便所に行かなくてはならない。日本での様に、たまりかねてデパートの便所に飛込むという訳にはいかないのだ。入口には太った(?)中年のおばさんがでんとひかえていて料金とチップを渡して始めて生理的要求を処理できるのだ。

ヨーロッパの旅をおえてパリに戻って、そこで暮した一ヶ月程、私が友人達との待合せに利用したモンパルナス駅、巨大で、すっかり近代的に生れ変ったその建物からは、古きよき時代のモンパルナスを私に想像させることは出来なかった。しかしその待合室に一人腰を下して友の来るのを待ち乍ら、出入りする老若男女の姿をなが

めるのが好きだった。パリにいるという実感をもった。その便所も毎日の様に利用した。始めて入ったとき、硬貨の単位を間違えて差出した私に、料金が多すぎると注意してくれた親切なおばさんに私はいつもチップをはずんだ。最初のころはその度に先に立って便所の戸を開けてくれたのが、顔なじみになるとチップをうけとつても「メルシー」とにこにこ愛想よく笑顔をむけるだけで、かまってくれなくなり、私は勝手に好きな便所を使用し、洗面所で化粧直しをしたり、スカートを巻き直したり心おきなくそこを占領していた。そして、フランス人の親切は「かまわない」ことかなと考えた。

ロワール河畔の田舎家に招待されたとき、そこでトイレットを借りたいと申し出たら、その家の女主人が、私を棟つづきの納屋の様なところへみちびき乍ら、「私のところは、何分田舎のことです」と言い訳らしいことをくどくど言った末、私の前に差し出したのが小さなふたつきバケツとちり紙だったのでおどろいた。その隣村の老女の家でも、陶器の大ぶりなつぼであった。何事も経験と勇敢に試みたが、自分の排泄物をそこに残して立去る事がとても気がかりであった。どう処分するのか知りたかったが、「田舎なので」と、おろおろしながら言い訳ばかりしていた素朴な人々に、それを口に出すことはた

めらわれた。あのロワールの美しい流れとあたたかい人情の中ですごした幸せな日々への想い出である。

(平山 房子)

卒業式考

三月になると全国の学校で卒業式が行なわれる。戦後二十八年になっても、戦前と全く同じ卒業式が白昼堂々と行なわれている。時代が変わっても、国家や教育の本質が変わらないからである。新聞を時々かざる新しい卒業式も、民主的と見せかけるための工夫をしたにすぎない。

中央正面に日の丸をかけた式場に卒業生が入場すると、先に入場している在校生や親、教師等がテレビの公開録画のときのようにプロデューサーのサインでパチパチと拍手を送る。もともとしきたりと伝統を重んじる学校では、校長が来賓を案内して最後に入場することもあるが、民主的でないから近年は少なくなった。全員の入場がすむと「一同起立、礼」という軍隊式の号令が下り、式が始まる。この日のために数日間練習させられた生徒たちも、何のために起立して礼をするかは教えてもらえない。正面の日の丸に対して「起立、礼」をするのだと

いうことを教師自身知らずに、式典のならわしだといつては、生徒たちを何度も立ったり座ったりさせ、礼の仕方が悪いとか、だらしなやかでどなりちらす。昔とちがって御真影がないだけであるが、この礼の目的が何かわからせるために、校長やPTA会長は壇に上るたびに日の丸に向って一礼する。

昔は国歌斉唱といったが、今は式歌斉唱といって君が代を歌う。起立、礼をして日の丸に忠誠を誓わせ、君が代を歌うことは、次の卒業証書授与と大きな関係があり、これを省くと卒業証書を渡せなくなるからだ。卒業証書授与が終わっても、卒業生は何度も立ったり、座ったりさせられ、長話を聞かされ、よい子の作文を読み、あげくの果てには「仰げば尊し、我が師の恩」などと歌わされる。大部分の小、中学校はこんな卒業式をしている。形式をちよびり変え、卒業祝賀式などといってもその意図するものは同じである。

卒業式は卒業生のために行なわれるものでなく、全く別の意味を持つものである。義務教育とは「十五歳までに道徳的偏見を詰め込み、国民としての意識を持たせ、国家につくす人間を育成する基礎教育で、国民はこれを受ける義務がある。」ものなのである。だから卒業式は「お前たちは国の行なう義務教育を受ける義務を果たした。

そのしるしとして証書をやる」ことであり、これは一学校の行事でなく、国家的行事になるのだから日の丸をかがけて君が代を歌わせ、さらに国家意識を高揚させる必要があるのだ。

義務教育の九年間に政府はあらゆる手段で若い魂と頭脳の去勢を行なう。小学校では、管理しやすい心にしひ込んで、よい子づくりに専念し、従順でよく教科書の勉強をする子をつくる。中学校ではその上に形式をたたき込む。丸坊主にして名札をつけ、御仕着せの制服だけでは足りずに、シャツ、靴、くつした、カバン、女の子のヘアーピンに至るまで色や形を統一して、団体行動と規律を教える。平等の名の下にファッショが横行する。かくして教師たちは権力の手先になり、生活指導と称して若い心を墮落させてゆく。一方、高校受験では差別と選別を押しすすめ、成績順に生徒たちを輪切りにして劣等感を植えつける。A高校は二十番まで、B高校は四十番まで、C高校は……番までとなり、DやF高校へ進む生徒には「努力が足りなかった」「AやBだけが高校ではない。こんどはガンバレよ。」などと見えすいたことをいう。「人間は努力しなさい。きみも社長になれる」という論理を学校ですでに教え込まれる。生徒たちがいくらがんばってもどうにもならないシステムがあること

は教えられない。10点評価で10点のつくのは3%、9点は4%、8点は9%……と決められており、一人のまちがいても許されないのだ。仮りにすぐれた教師がよく指導して、全員が百点近い成績でも、難しい試験をやって全員が0点でもこの評価の割り合いは変わらない。

学校は恐ろしいところである。時には警察や裁判所よりも権力的であり、管理的である。飼いや慣れない教師や生徒は次々と追放していく。管理できない生徒は問題生徒であり、処分される。だからその権威を保持するためには、重くする壮厳な式典が必要なのである。高校生活の中でこれに気付いた生徒が卒業式に証書を破ったリ、発言を求めて壇上にかけることはごく自然なことなのだが、学校としてはこの国家的行事を破壊する者は反逆者で、これを許すことは学校の存在にかかわることになる。つまり国家主義と権力主義を維持するために、卒業式をりっぱに挙行しなければならないのだ。学校行事の中で一番重要な卒業式に日の丸と君が代がなくなることは国家否定につながることで、校長の判断を越えるものである。(例え政権が交代しても、公立学校に於いて、殊に小、中学校等の義務教育の学校では国体維持のため、国を賛美し、感謝し、国家のために生きることがモットーとするプログラムを卒業式に入れなければ公教

育の意味はなくなるから必ず新しいことを式典に盛り込むであろう。)だから管理者として校長は、卒業式の形式を変えたり、日の丸をはずすことは自分の首にかかわる問題であり、大部分の教師はオリンピックや相撲の千秋楽でも君が代は歌うという次元で片付けてしまう。「たかが卒業式で日の丸や君が代があってもどうってことはない。式典のならわしなんだよ。卒業式ってそんなに重要じゃない。日々の教育が問題だ。」とおっしゃる。どうってこともなく、重要でなければ省いてもよいはず

インタナショナルの組織

M・バクーニン

国際労働者協会に課せられた限らない任務、すべての搾取者、使用者、原料と生産手段の所有者つまり資本のすべての種類の代表者たちの軛から労働者と人民の労働を決定的に完全に解放する任務は、経済的及び物質的だけでなく、同時に同程度に社会的、哲学的及び倫理上の任務なのである。もし望むなら、それはまた政治上の任務でもある。ただし、国家の廃止による政治的なすべての破壊という意味において。

いまさら論証の必要があると思わないが、最高度の文明国家の政治、法律及び社会の現体制内の労働者の経済的解放は不可能であり、従って、それを期待し、あるいは実現するためには、現体制のすべて、国家、教会、裁判所、銀行、大学、官僚、軍隊、警察——これらは特権によって壁を高くしたプロレタリアートに対する要塞に他ならない——を破壊しなければならない。しかも単一の国でこれらを覆すだけでは十分でない。十七・八世紀

だが、それはヘリクツになるらしい。重要でない卒業式、千秋楽と変わらない卒業式のために何日も練習をし、これに反対する教師や壇上にかかけ上って演説する生徒は異端者であり、反逆者となる論理をわからせる教育が公教育なのである。

卒業式から日の丸や君が代を取り去り、自由な討論をやり、学校や教師批判をやり、でなければギターをかかえてフォークを歌い、ダンスに興じる日に変えることは一つの戦いである。

(滝沢 昇)

の近代国家の成立以来、すべての諸制度の間には国境を越えてつねに発展する連帯、非常に強力な国際同盟が存在するから、すべての国において覆されなければならない。

国際労働者協会に課せられた仕事とは、現存の政治的、宗教的、法律的及び社会的世界を完全に清算し、新しい経済、哲学及び社会の世界に置き換えることに外ならない。しかし、このように巨大な計画は、いずれも強力で、巨大でそして完全な二本の柱の助けがなければ実現することはできない。その一つは、人民の常に増加する経済的欠乏と苦痛とをしてそれを取り戻すための要求の強さであり、他は新しい社会哲学、実存的な人民の哲学である。それは実際の科学、いいかえると実験的で同時に合理的な科学によってのみ鼓吹され、人間的原理、人民大衆の永遠の要求の表現、即ち平等と自由と全世界の連帯以外の基礎を容認しない。

人民はこれらの要求によって推し進められつつ、この原理によって勝たなければならない。この原理は、いまいったように、人民はその内部に本能的に常に保持するという意味において、人民にとってそれは他人事でもなければ、新しいことでもない。人民大衆は、彼らを抑圧するすべての軛からの解放を常に切望している。そして

彼ら労働者こそ社会の養い手、文化とすべての富の創造者である故に、奴隷の最後のもの、すべての奴隷の中で最も奴隷的なものである故に、彼らと共に全世界の解放なしに解放されえない故に、彼らは常に全世界の解放、即ち普遍的自由を切望している。彼らは常に自由の最高の状態である平等を熱望し、そしてみじめにも彼らの子供たちが散り散りの個人的存在となるその中に永遠にふみつぶされつつ、いつもその救済を連帯に求めてきた。今まで連帯の喜びを経験したことがない、またあったとしてもほんの僅かであって、幸福に生きるということは、他人、それも不幸な者たちばかりを犠牲にし、搾取し、征服して利己的に生きることの意味する。それ故に、人民大衆は友愛に覚め、実現してきた。

それ故に、社会科学とは道徳教義として人民の本能を発展させ、調整するものに他ならない。しかし、この本能と科学との間に満さなければならぬ深淵がある。なぜなら、もし正義の本能で人民の解放に足りるとしたら、人民は久しい以前に解放されているからである。この本能は、人民大衆が正に暗く、悲劇的な人民の歴史的過程の中で宗教的、政治的、経済的に彼らがいつも変わらず犠牲者であったというすべての不条理を認めることを妨げるものでない。